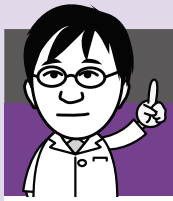

教授の『職場の健康づくり研究室』

第119回 インドネシア紀行（その一）

3月初旬に学生を連れてインドネシアに行った。首都ジャカルタから420km東に位置するスマラン市のデイポネゴロ大学を訪ねるためだ。デイポネゴロ大学は、鳥取大学医学部の協定校で関係の深い大学である。はじめてのインドネシア訪問だったが、ジャカルタに降り立つと気温28度、湿度90%という熱帯気候に身体がなかなかなじまなかった。ジャカルタの町は活気に溢れホンダのバイクが大渋滞の中を縦横無尽に走り回っていた。高層ビルの隣には貧困層のスラムがある。夕刻になるとモスクからは祈りの声が聞こえる。横丁ではネコやニワトリが走り回り、人々は屋内で昼寝をしている。酒のにおいはしない、イスラム教ではアルコールは厳禁なのだ。

▼インドネシアの医学生たち

スマランではデイポネゴロ大学の斡旋で、地域医療の前線となるプスケスマス（診療所）やポシャンドウ（コミュニテイセンター）を見学した。プスケスマスは、妊婦の健康管理と出産、子供のワクチン、糖尿病や高血圧の治療、結核の発見と治療、デング熱など感染症の調査など、その守備範囲はとても広い。日本のクリニックと保健所を混合したような公的診療所であり、医師、看護師、助産師が働いている。子供の声が聞こえ、とても賑やかだ。研修医はここで半年間の勤務が義務付けられている。彼らは最前線で何が起きているのかを目の当たりにし、その後に大病院での研修に入る。人口当たりの医師数は日本の約1/3と少ないのだが、医学生たちは地域医療の現場に身を置き、庶民の病気や貧困に向き合う。学生たちは概して優秀で礼儀正しい。質問にも英語で的確に答え、インドネシアの実情を踏まえた鋭い質問を投げかけてくる。自分の頭で考え、自分の言葉を持っている。同世代の日本の大学生よりもずっと成熟した大人という印象だ。逆に私たちのほうが日本のことを正しく理解できているのか、問われている気分だった。

▼私たちが学ぶべきこと

インドネシアの憲法にはパンチャシラという原則がうたわれている。建国五原則のことで、①唯一神への信仰、②公正で文化的な人道主義、③インドネシアの統一、④合議制と代議制における英知に導かれた民主主義、⑤全インドネシア国民に対する社会的公正の五つである。インドネシアは人口2億7000万、国民の9割がイスラム教である。17000を超える群島からなり、公用語はインドネシア語だが500以上の言語が存在する。ちょっと考えると、イスラム教とそれ以外の宗教対立や民族間対立を心配する。しかし、少なくとも私がインドネシアで接した人々は、信じる神はあっても他者に強要せず、相手の宗教や価値観を尊重しようとする姿勢が感じられた。自分だけが正しいと考える正義は、対立や戦争を生み出す。民主主義、社会的公正、こういった考え方は現在の日本においても尊重すべきものだ。たとえ理想であっても、5原則を憲法にうたい、日常の生活や教育のなかでパンチャシラを尊重し、笑顔で他者を迎える国民に、人類の可能性をみる思いであった。今回の訪問で、私はインドネシアという国が大好きになった。

鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授
谷口　晋一
（たにぐち　しんいち）